係に障害を持っており，健常な児童に比べてストレスを受けやすいと考えられた．これらの点に注目して患児のストレスの開放に努めると伴に，主に両親を通じて家族内の緊張関係を緩和するよう働きかけた所，患児のチックは軽快し，学業や対人関係，生活全般にわたって改善が見られた．トゥレット障害は器質因を基礎にその症状の発達や程度，経過には心理環境因が関与していると考えられるが，今回のように薬物を用いずに心理環境因の整理や改善だけでも劇的にチックが改善する症例がある事はトゥレット障害の治療において心理環境的アプローチも一考の余地があると考えここに報告した．

15）母親に身体接触を求める分裂病患者について

田村　絹代　（五日町病院）
田辺　洋之　（長岡赤十字病院 精神科）
茂野　良一・伊藤　陽（新潟大学 精神医学教室）

精神分裂病患者の中で，その経過中，特に母親に対して身体接触を求める者に遭遇することがある．今回我々はそのような行動が認められた9例の患者について，その臨床的特徴を明らかにし，身体接触行動の意味とそれを治療に生かす道を探ってみようと試みた．

〈結果〉　1）9例中男性が6名，女性が3名で，発症年齢は1例を除いて17才～21才の間に分布していた（初診時年齢も同様）．男性の方が多いという結果については，男性患者が異性である母親に身体接触を試みた場合，母親自身がそれを受容し難く，問題行動としてとらえやすいためとも考えられる．

2）病型は，破瓜型もしくは破瓜型近縁の病型が6名，妄想型が2名，分類困難型が1名であった．

3）父親の特徴は，患者のことに無関心，厳しい，無口などの傾向が認められた．一方母親には，不安耐性が低いタイプと，明るくのんきで楽天的なタイプとが見られたが，とりつくしまもなく冷淡で拒絶的という母親ではないという点で共通しており，その意味で，患者にとって多少は情緒の通じる，受容の可能性のある相手であり，そのため身体接触行動が現れやすいのではないかと推察される．

4）身体接触行動が現れる時期は，9例全例で，急性期の異常体験や興奮，緊張病性昏迷などが消褪した後の無為自閉的な時期（3カ月～2年半）であった．これは，身体接触が「精神病後疲弊期」に見られた，という永田らの報告と一致している．また症例の中には，母親への身体接触行動が軽減・消失する過程で，井上らの報告に見られるような移行対象（猫など）が出現したり，大森らの云う「おどけ」の行動を示した症例もあった．

5）この時期の薬物治療として，9例中4例で，クロルプロマジンが身体接触行動に対しては比較的有効であった．その理由としては，急性期を過ぎたこの時期には，切れ味の鋭い薬剤よりも，むしろマイルドな鎮静がクロルプロマジンによって得られるのではないかと考える．

6）治療的対応としては，分裂病患者の示す身体接触行動が，治癒過程において重要であるというこれまでの諸研究（永田ら，大森ら，飛鳥井ら）を踏まえ，治療者が母親をサポートし，その行動をむげにはねつけず受容して行くよう，母親に促していくことが必要であろう．それはすなわち，身体接触による十分な保護や依存の充足が，傷ついた自我の再構成へと向かわせる，「育て直し」の意味を持っていると考えるからである．

〈まとめ〉　以上述べた臨床像が，身体接触行動の見られる患者に特異的なものなのかどうか，また仮説的に考察した点が妥当なものであるかどうかについては，同様の症例をさらに集めて検討を重ねると共に，他のタイプの身体接触を示す患者や，身体接触行動を起こさない分裂病患者との比較検討が今後必要であろう．

16）デイケア10周年を振り返って
―その活動報告と今後の課題―

滝浪　文子（悠久荘精神科ソーシャルワーカー）

はじめに：当院の DC は昭和57年9月に開始され昭和58年8月厚生省より精神科デイケアとして認可された．平成4年8月，10周年目に入り，それを記念し10月26日無事10周年記念行事を取り行う事が出来た．記念講演，昼食パーティー，シンポジウムと盛り沢山の内容をメンバーとスタッフが一緒になって取り組む事が出来たのは，長い10年という年月活動の積み重ねによるものだと思う．

今ここで10年目に入ってその活動内容を振り返り，その果たしてきた役割，問題点，今後の課題，そしてこれからの活動の進め方について考えてみたい．

活動の流れ：4～5人で始めた DC も10年目に入った現在では登録数59名にのぼり，毎日の参加者数は40名と増加している．退院後の受け皿，やすらぎの場，いこいの場，再発防止としての役割を担い，多くのメンバー・スタッフのかかわりの中で今日に至っている．

平成3年9月には増えてきたメンバーの中，参加の目的，ニーズ，年齢差の違いを考え，思い切ったプログラ